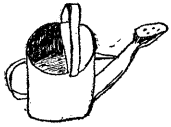
い。引っ込み思案な、いわゆるおとなしい、従順な子、孤立的な子どもなどは、保育者にとってはあまり扱いにくくはなく、積極的な妨害を感ずることもないかもしれないが（そのために良い子どもである考えられがちだが）、これらの問題は、将来その子どもの社会生活への適応を妨げるという点で、重大な結果をまねくことになる。われわれは、現在の自分の保育上の都合だけで、子どもの性格・行動を問題にするのではなく、どこまでも、子どもの将来の幸福、将来の円満な人格形成という、純粋に教育的な立場から問題にするのでなければならない。（大阪樟蔭女子大学）



西本氏の論説にも指摘されているように、幼児の性格や行動の取扱いは機械的にゆかない。「このような性格や行動の子どもはこういう具合に指導すればよい」といったような一般論はたてられず、ケースごとに理解し、考えてゆかねばならないのである。以下に掲げる例も、そのような観点から見られなければならないのであって、このような子どもは、いつもここに示されたような指導をすることによって向上するとは限らない。ただ、ここに掲げられたような例が、かく指導されて、かく向上したということを見ることにより、私どもが今、げんに当面している類似の子どもの問題を考えるのに、参考とすることができる。以下の例をこのように考えて、みてゆきたい。

A　ボス的な子ども

ここに掲げられるボス的な子どもは家庭における母と祖母のくい違いというようなところに根源があるようである。そして、幼稚園でも、最年長のひとりで、腕力的にも強かったということがボスとしての位置を強めているようである。ここで、指導上、特に注意している点は、次のような諸点である。

- わがままな要求が通らない場面を経験させる。
- 今まで興味のなかった絵画製作をたのしむことによって、根気よく仕事を最後までさせる。
- 友人関係の中で、他人のことを気づかせることによって、第三者としての立場から判断できるようにする。
- 得意とする望ましい活動（腕力によらない）の中で自信をもたせることによって、よいリーダーにするようにしむける。

ボス的な子どもの指導

関根静江

H児の家族は祖母・父母・H児の四人から成り、母親の言では、H児の要求はなんでも通されてしまうということだった。またH児の体力は、四才児にしてはずい分強く、近所に同年の友だちがおらずほとんど年上の子どもと遊んでいた様子である。

そんなH児が始めて集団生活を経験したクラスは、男児十八名、女児十八名の三十六人であった。そのうち男児は四、五月生まれの者がおらず六月生まれはH児を入れて三人、他は九、十月生まれが比較的多く、各月の平均は三人ぐらいである。六月生まれの他の二人は一方が体力はH児よりあっても友だちに親切で素直な子ども、一方の子どもは生活経験がとぼしい為、入園当時こちらからの働きかけを拒否してしまう子どもであった。そんなわけでH児のわがままが安易に通せたのだと思う。

入園当時は、ブランコに乗る時、手を洗う時に順番を守らないH児を友だちがとがめると、その子を腕力で泣かしてしまうという状態であった。またH児は、落ちついて絵を描いたり絵本をよんだりすることを嫌い、すぐ外に飛び出したがる。おもしろい楽しい経験がない為にこれらのことに興味がないのではないかと思われた。

ある時、母親と話合いの機会をつくり家庭での様子をうかがってみると、母親も子どものわがままには困っているが、母親が禁止した事をおばあちゃんのところでは許されてしまう、ということであった。そこで母親と相談して、次のことをお願いした。

- しつけの点で祖母と母親との意見が一定すること。
- 同年令の子どもと遊ばせること。
- 家庭でも絵をかいたり絵本をみたり静かな遊びにも興味を持つよう心がけること。

でもこれらを実行する為には、嫁と姑の関係があったり、また近所に同年令の子どもがいないためクラスの比較的近い子どもと遊ばせたいと思ったところ、力に差がありすぎて家人に心配されたり、なかなかすぐには事が運ばない有様だった。

・実際保育の中での指導

まず集団生活の中でH児に経験させたいこととして

- わがままな要求が通らない場面を経験させる。
- 今まで興味のなかった絵画製作をたのしむことによって、根気よく仕事を最後までさせる。

などを主としてあげ、欲求不満が起らない為にH児のよい点をみつけて、自信を持たせながら指導しなければならぬと思った。

つみ木を主とした自由あそびの中で友だちと協力してあそぶ、ということに重点をおいて、特にひとりでは持ち運びの出来ない大型つみ木を入れ、打ち込みつみ木、小型つみ木の三種類を用意、打ち込みつみ木で遊んでいた一部の子どもに誘いかけてみた。すると月光仮面ごっこをやっていたH児のグループが、大型つみ木に興味を持ちたちまち大勢がワイワイ寄って来た。そこ

で「力もちの人ホールからもっと積木を運びましょう」と声をかけると、H児が先頭になりホールのつみ木をおろしはじめた。

H児が一番大きいのをひとりで持とうとしているので「Yちゃんと仲よしで運んで行けば」と話しかけると、「イイヨイイヨ」とがんばってはみたがやっぱり歩きにくいので、歩み寄ったYと笑いながら持ち運んだ。

保育室に運び込むと、案の定けんかが始まった。一方はH児の高くつみ上げた組、一方はお舟の形に並べて、女児ものせて楽しんでいる組である。舟をつくったグループからH児がつみ木をとってしまうというのである。そこでみんなに相談し「みんなが自分勝手につみ木をとってしまったらどうかしら」と問うと、みんなが「ダメンナッチャウ」といい「どうしてでしょう」「ツメナイヨ」「じゃどうすればよいかしら」と交わしているうちに、日頃友だちに親切で好まれているY児が「ナカマニナルー」と、提案した。「そうね仲間になることいいことね、だけど仲間になるってどういうこと」ときくとみんな「かしてあげるの」と言いH児も承知して、混ぜて遊ぶことになった。そのうちにまたけんか。今度はクラスで一番体の小さいA児とT児の二人、三角つみ木のうばい合いである。A児がいつもみんながするように、H児に言いつけた。H児は立ち上がって来てT児からつみ木をうばおうとしているので、急いで「Hちゃん、AちゃんとTちゃんがけんかになったのは、どうしてだかきいてあげてちょうだい。」というと、つみ木をかかえながらT児に「Tちゃん言ってみな」と思いがけないやさしい声で話しかけ、T児が「ボクが先にとったのにAちゃんがとるの」といいA児がそれ簡を単に認めると、「フーン」といってT児につみ木を渡した。

いつもわがままを通すH児であるが、第三者の立場で観る時、正しい判断をするようである。

次は絵画製作指導の中の例である。

豆まきの鬼の面を製作のとき、何色かの色をとりどりに塗りつぶしたH児が、もうじっとしておれず前に飛び出して来た。他の者が製作中であるし、邪魔になるような遊びは困るが、H児が自分の作ったお面に興味をもっているらしいのでそっとしておいた。するとまだ耳にかけるゴムのついていない面を顔にあてて踊り出したのである。いつの間にか知能も高く、意志の強いF児も前に出て二人で足を交互に上げ、調子をとりながら、「オニーノダンス、オニーノダンス」と口ずさんでいる。あまり楽しそうなのでさっそくオルガンにそのままうつしてみた。もうほとんどお面が出来上っていたクラスの子どもたちに「FちゃんとHちゃんが作った歌おもしろいわね」と話しかけるとみな喜びの声をあげ、H児とF児は「ワーイハズカシイヨ」と耳をおさえて机の下にかくれてしまった。他の子どもたちは、「やってくれ」とオルガンの周りにお面を持って集まり、その後も保育の中でうたうと、子どもたちの顔がイキイキしてくる。思わぬところで保育計画が変更してしまうのであるが、こんな時子どもの中にある自然の姿を発見して、たのしい思いがする。また、リズム楽器の指導のとき順番に打ったタイコの打ち方が、H児が一番

力づよく、拍子も正しくとれていたので、クラスの子どもたちが自然にそれを認めH児には生活指導の中で話合いをし、力もちでタイコも上手に打てるのだから、友だちのいやがる乱暴はしないことなど約束した。H児は「タイコさんが休むと楽隊あそびが出来ない」といって楽しんで登園し、自信もついたようである。

このように保育してH児に感じられることは、H児に腕力で対抗する者のいないクラスであるからなおのこと、よい意味のリーダーになるよう方向づけねばと思った。また結果としては乱暴は悪いが、体力のあり余るH児は案外素直であること、わがままばかり思われる乱暴の中にも理由のあることなど感じた。（東京・八幡幼稚園）

B　乱暴な子ども

ここに掲げられる「乱暴な子ども」は、やはり、家庭の中に歪みがあるようである。その原因ははっきりしないが、子どもは愛情を欲しているようである。そこで、おとなの注意をひくために乱暴をする。この例で指導上特に留意していることは、

「子どもの信頼をえて、指導する」

ということである。このことはどの場合にも、共通に通用することであろうが、この例ではこの態度が成功に導いている。

また、自分の行動が他の子どもにどのようにめいわくをかけているかを知ること、それによって、他人の存在を自覚することが、子どもの行動を向上させるのに役立っている。

乱暴な子どもの指導

荒谷昭子

A君（入園当初四才男児）は父母と三人暮しで通園に三十分位かかる野道を歩いて来る。この子の問題は何事もないところから起ってくる。それも毎日のように……。人が通りかかっても傍にいても、つねったり叩いたりし、その為に子ども同志では最初全然友だちはなく誰も傍へ寄りたがらない。教師が少しでも注意すると手を噛み、叩き、蹴り、ツバをかけはじめ、それでいてにやりと笑うようすは少し異常なほどであり、他の子どもがびっくりしてみている位であるが、原因が何もなくとも始まるので、その起ってくる正体が摑めずに、変った子だと悩んだ。勿論それが起った時は反抗が終るのを待ち、いけない事であるのを認めさせて最後は「ごめんなさい」と謝るのだが、決して心の底から自分のしている事がいけないとは思っていないようであった。ひとりっ子なので、家で放られているはずもなく、いじめられてもいないはずであるが、ある日母親に家での様子をきいた。すると、小さい時から祖父母の傍で同居していてあまりかわいがりすぎ、父母が親としての教育が出来ず困った末に家を借り、祖父母から離れることにして、その為幼稚園に来たことがわかった。その時もいっしょについて来て母にも同じようにすぐ手を出